スクールカウンセラー活動と連携

神村　栄一
（新潟大学教育人間科学部）

はじめに

かつて，10回ゲームという遊びが流行したことがあります．同じ言葉を集中して発声したり，耳にしたりすると，脳内でその意味の処理が麻痺して，直後の質問で単純な間違いをおかしやすくなります．

「連携」という言葉は，心理臨床の場面でしばしば耳にします．スクールカウンセラー（以下，ＳＣと略記）が出かける学校現場でも，長く強調され続けてきている言葉です．あまりにも頻繁に目や耳に入り，口から発しているがゆえに，その意味することが，いつの間にか「軽く」なってしまっていることはないでしょうか．

さて，辞書によれば，「連携」とは「同じ目的を持つ者が互いに連絡をとり，協力し合って物事を行うこと＜広辞苑＞」だそうです．このシンプルな定義をもとに，以下，考察してみたいと思います．

同じ目的を持つということ

ＳＣ活動において，この「同じ目的」とは，言うまでもなく，児童・生徒の生活の質の向上，でしょう．

むろん，たとえば不登校のお子さんについて，登校日数の増加，教室への復帰だけが生活の質の指標になるわけではありません．その子の生活の中にある苦痛が徐々にでも解消され，周りに受け入れられつつ自らが自らを受け入れ，未来に展望が持てるようになりやすくなることなどが目標です．

ここで気をつけなければならないのは，ＳＣについて「教職員と異なる価値観を持って活動する」と説明されることがしばしば誤解をまねき，連携の基本とも言えるこの「同じ目的を持つ」ことを，ＳＣ側から拒んでしまうようになることです．「具体的な問題が減る・適応的なふるまいが増えることに目が向きがちなのが一般の学校教師で，ＳＣはもっぱらその子の心のありかたについて考える」などと，目標設定における違いを強調しすぎないようにしたいものです．

コミュニティ・アプローチにおいて，まっさきに連携すべき相手は誰でしょう．私なら答えは，「当の本人」です．ＳＣ活動を含め，コミュニティへの支援では，ともすると本人のニーズとはまったく別なところで問題意識が生まれ，本人とまったく接点がないところで，「支援体制」などができあがりがちです．たとえスムースな意思疎通がかなり困難な状態にあるお子さん・ご家庭であっても，どうにかつながる，接点を持つ，まなざしを向けることは可能です．当の本人の状態，願い，苦痛をしっかりアセスメントしながら，その子を支援するための体制づくりをめざしていきます．

なお，連携体制の確認と構築について一言追加すれば，心理士ＳＣたるもの，関与する個人，家族，組織集団，専門領域固有の特性を，よく把握した上で，学校の連携づくりを支えていかなければなりません．個人や組織の特性を分析した上で見通しを立てる能力が，臨床心理学の専門家の「売り」のはずです．また，実際のところ，医療，学校教育，法律・矯正など，さまざまな領域で活躍する仲間・ネットワークを持つ点にも，心理士ＳＣならではと期待されることが増えているようです．

○チェック・ポイントその１：支援を要する本人を中心とした，「同じ目的」の共有ができているか．

互いに連絡を取り協力し合うということ

連絡とは，情報を交換しあう，という意味です．まず情報を交換し，その上で力を合わせる，ということになりますが，その間に「情報理解の共有」というプロセスを挟むということも，心理士ＳＣの大切な役割でしょう．

どれだけ普遍的な用語なのかわかりませんが，最近の学校現場では，「行動連携」，およびこれと対比される「情報連携」という表現があるそうです．

何かのトラブルがあれば，その子のクラス担任その他の教職員から，家庭・保護者から，地域から，外部の専門機関（医療機関・行政機関）から，情報を得ることになるのでしょう．これらは「情報連携」です．それに対して，実際にこの事例に対して，誰がどのように対応するか，ということを打ち合わせするのが「行動連携」です．

わたしは学校の先生方とこの話に及ぶと，よく「『情報だけ回しても不十分』という警告を発している点で，とても意味のある言葉遣いだとおもいます．しかし，さらに一歩進めて，『シナリオ連携』なぞはいかがでしょか」と，提案させていただきます．

忙しい中ではつい，「情報は集まった，さあ，動こう」ということになりがちですが，「情報の咀嚼・統合と，作業仮説の共有，お互いの動きとその意味の確認，今後の見通し」などについて共有することが，結局「急がば回れ」になると感じることが多いからです．

むろんここでの「シナリオ（見立て）」は，支援のごく初期にりっぱなものを作り上げ，それをそのまま後生大事にする，というものではありません．支援の経過とともに，常に，更新されてゆきます．そのための打ち合わせも，必要に応じて関係者の間で行われなければなりません．つまり，この会議では，新しい情報が追加させるだけでなく，シナリオそのものの更新作業が含まれます．

シナリオ連携の意義と楽しさを実感している先生が学校内におられれば，ＳＣも仕事をしやすいのですが，そうでない場合は，ひとつひとつの事例の支援の中で，実際にシナリオ連携することの意義を実感してもらえるとよいでしょう．

「ＳＣから事例について説明してもらうと，漠然とした不安が消えて，とりあえず落ち着いてやれることからやっていこう，という気になる」とか，「教師として何をすべきか，見通しが立つのでありがたい」といった評価をいただける瞬間が，シナリオ連携の意義についてコメントするチャンスかと思います．具体的な援助を始めるよりも先に，理屈で解説しても，なかなか実感としてご理解を頂きにくいようです．

○チェック・ポイントその２：情報だけでなく見立てを連携することの意義を，学校内に浸透できているか．

危機介入の連続としてとらえたSC活動における連携

2004 年は，国内外で多くの自然災害が発生しました．子どもたちの「心の闇」，などと，マスコミにとりあげられるような事件も発生しました．私自身も，危機への介入について，いろいろ貴重な経験を持つことができた一年でした．

それを受けてというわけではなく，前から感じていたことですが，ＳＣというのは，少しオーバーに言えば，毎週のように起こっている学校内の危機の対応に出かけているようなところがあります．

週に１，２回の勤務といえども，毎回ぶつ切りではなく継続性があります．しかるに，そこは何百人という思春期真っ盛りの中学校，あるいは，児童期から思春期への移行期を支えている小学校などに出かけるわけですか

ら，出勤のない６日間の間に，ＳＣとして係わることになる，大小多様な「危機エピソード」が発生しているものです．この点も，いわゆる相談・治療のための機関でしっかり構造化された心理臨床活動との大きな違いです．安易に，「予約待ちで，順に伺っております」というわけにはいかないことが多いのです．

危機介入とは，「そのコミュニティが持つ資源で対処困難な事態において，その対処の力が発揮されるまでを目標に行われる限定的支援」とされています．危機介入においては，すみやかに問題の概要，児童生徒本人自身およびそれをとりまく周囲の脆弱さと資源の状況，などの情報を収集して緊急的な対応を検討しなければなりません．まさに，すみやかにかつ効果的に連携し，その中で仕事をすすめていく，「したたかさとしなやかさ」が問われる専門性であると言ってよいでしょう．

○チェック・ポイントその３：学校における大小の危機に備え，柔軟な連携づくりへの備えができているか．

おわりに

少年たちのあこがれのスポーツ選手には，野球派，サッカー派，バスケットボール・バレーボール派などがあるようです．攻撃時にバッターとランナー以外はベンチに座っており，サインで連携しあう野球のような，個人プレーの積み重ねとしての連携は，すでにＳＣ活動ではあたりまえです．これからは，サッカーのような，大まかな役割は各自が認識しあいながらも，局面に応じて柔軟にフォーメーションを創造・変容していくことさえ，必要とされているのかもしれません．

少なくとも，ＳＣ自身が，「連携」という言葉の意味処理を麻痺させてしまい，「かけ声ばかりの上滑り」に陥ってしまうことなど，ないようにしたいものです．